

# 令和5年度 学校関係者評価報告

鹿児島中央看護専門学校3年課程看護科では、平成23年度より教育活動実施状況を総合的かつ客観的に点検・評価し問題点を明らかにした上で次期の教育活動や学校運営の改善に活かし、開かれた学校づくりを進めることを目的とした「教育自己点検・自己評価」（令和元年度より「教育自己評価」とする）を実施しています。更に、令和元年度から関係業界、保護者代表等、学職経験者から成る「学校関係者評価委員会」を設置し、学校関係者評価を実施しております。

令和6年3月29日に「令和5年度教育自己評価」「令和5年度事業報告」の結果をもとに、学校関係者評価を実施いたしましたので、以下のとおり報告いたします。

令和6年4月5日

## ●学校関係者評価委員

高谷 哲也 鹿児島大学教育学部  
富安 恵子 前鹿児島中央看護専門学校校長  
木佐貴 涼子 公益財団法人慈愛会統括看護部長兼看護部支援室室長  
松山 郁子 同窓会やよい会会長

## 評価会参加教職員

校長：今村英仁 副校長：久徳美鈴 顧問：大保まり子 事務長：岡村則和  
教務主任：櫻美尚美 実習担当主任：中村栄子 専任教員：大磯陽子、飯田かずよ、蒲地恵美

## ●令和5年度事業報告総括（久徳）

### 【財務の視点】

- ・本年度も学生確保に苦慮、推薦入試の受験者数が昨年比(-10名)となった。高校生減少に加え、大学受験の流れは大きい。推薦、一般（一次）で37名の合格としたが、辞退学生もあり定員に満たず、二次・三次試験まで実施した。入学生35名の確保に留まった。
- ・外部環境もふまえ、学生定員確保への対応を強化する必要がある。（広報の強化、学校の在り方検討を次年度の計画につなげる）
- ・本年度の学校運営においては、在籍学生数134名（120名定員）となっており、安定した運営ができた。必要な備品等の購入を計画的に行う。
- ・地域医療を支える人材輩出については、進学2名を除く全員が就職した。（県内就業率97.5%）県内医療人材として貢献度は高い。

### 【顧客（学生）満足の視点】

- ・学生ひとり一人の学業支援については、各学年担当、事務職員、実習に関わる教員全職員で支援にあたってい

る。年々、指導を要する学生（学習面、健康面等の課題）が増えている現状がある。会議等で指導方法について共有し、学生の目標を支えている。休学者 2 名も R6 は復学を予定。

・3 年間の教育の成果（到達度自己評価）では、平均 3.53 となっており、目指す卒業生像にほぼ到達している。しかし、国内外への関心や医療システムへの関心が低い特徴があるため、新カリキュラムで強化すべきところではある。

・社会人基礎力について、全学年学生個別の自己分析シートを活用し、学生が自ら目標を設定し、行動できるよう支援している。

・国家試験サポート体制は定着している。第 19 期生 3 年生も全教員で強化学習等支援。クラスの団結した取り組みもあり、最終模試では不合格ライン者はなく、全員で国家試験に挑んだ。結果は合格 41 名、不合格 1 名、合格率 97.6%であった。また国家試験対策は 1・2 年生の学習が土台となるため学年を中心に強化している。本年度は、特に基礎学力や勉強法を身につけるために、1 年生を全教員でグループ学習を支援した。

・放送大学の併修生の支援は本校の強みである。本年度は、学生交流を進め、つながりを支援した。

・慈愛会奨学金、専門実践教育訓練給付金給付、高等教育無償化支援等学生の学びを支える支援を継続。慈愛会奨学生は年々低下している現状がある。

#### 【顧客（教員）満足の見点】

・本年度 4 月は専任教員不足であったが、本年度は実習指導教員含め 4 名の教員の採用ができた。全員がベクトルを合わせて教育ができるよう風土が整備されつつある。職員各自の持てる力が発揮できるよう更なる仕組みづくりを行う。

・事務部、教務事務との協働は定着し助け合っている。

#### 【業務プロセスの見点】：事業目標 3 点について取り組んだ

##### ① 「社会から求められる看護実践力の高い看護師の育成」

・本年度は、1・2 年生が新カリキュラム、3 年生が旧カリキュラム（最終）となったが、カリキュラムは計画に従って実施できた。新カリキュラムでの実習も本格的に開始され、実習ルーブリック評価の内容も教員間で検討重ね整備できた。

・授業評価は本年度、内容を改正し投稿率も上昇した。授業評価は 4.2 以上の高い評価であった。学生も主体的に臨んでいる評価ではあるが、若干の学生は授業中の居眠りや学習姿勢に課題を抱える学生もいる。授業評価を学生と共に取り組むことは学習の動機付けとなるため今後も非常勤講師も含めて継続していく。

・地域への関心を高める学習活動は計画に従い実施できた。その学びの共有により人々の暮らしや災害、慈愛のこころを育む機会となっている。

・本年度も現場の看護師の参加による総合演習やケーススタディなど取り組むことができた。特に救急場面に対応する看護師の判断は学生の学びを深めている。また、本年度は実習開始前の現場の指導者による学校での OR は、実習における不安軽減となり学生は安心して実習に臨むことにつながっている。

・R6 は新たな統合実習が開始となる。チームナースから学ぶ臨床判断の機会を重視していく。

##### ② 「基礎教育の動向に対応した学習環境の整備、学生支援体制の強化」

・教育の質の向上を目指して、チーム活動を継続。看護研究や研究授業等実施できた。R6 は現場の看護師と協働して、シミュレーション学習を実施していく。

・安全管理体制について、定期的に会議を開催、感染症対応や校内の事故防止活動、教職員の労働安全管理等共有した。BCP マニュアル（現行の安全管理規定）の改訂に R6 は取り組む。

### ③ 「学校の存在価値を高め、地域に必要とされる学校運営の推進」

・学校の存在価値を高める活動として、1 年生を中心にかごしま国体（障害者スポーツ大会）に 4 日間参加できた。学生は障害者の方々との交流体験を通して、障害を抱えながら社会の中で生活し活動する人々への理解を深めており成長する機会となった。

・鹿児島県看護教育協会の任務は滞りなく終えた。令和 6 年度は、専任教員養成講習会が開催となるため、養成に関わる支援や実習施設としての協力を学校として行う。

・学校移転に関してプロジェクトの進行はなかった。学生確保も課題となっており、現段階での移転は難しいと考えられる。地域の中で役割を果たせる学校の在り方について再検討する計画である。

・教育自己点検、自己評価は本年度も継続して取り組んだ。学校評価員委員会の決定事項などを教員間で共有し学校の取り組みを周知し、評価した。

### 【学習と成長の視点】

・本年度は、新カリキュラムのディプロマポリシーを目指した各科目の教授法や工夫していることなどの教員間の共有を行った。それぞれが活かせるものを自己の授業に取り入れるなど工夫していた。

・看護教員ラダーについては 4 年目となり本年度は 4 名がそれぞれのラダーを取得した。R6 はさらに運用が定着するよう目標管理や評価項目等の見直しを行う。

・教員の地域への貢献について、実習指導者講習会の講師や専任教員養成研修の準備等へ参加し、貢献できた。

・さらに看護協会の専任教員研修への講師派遣（本校のルーブリック紹介）、基礎看護学授業（環境）等の発表等ができた。本校の教育の実際を知ってもらう機会となった。

## ● 令和 5 年度教育自己点検・自己評価 報告（櫻美）

・令和 5 年度、教育自己点検・自己評価結果と次年度への改善事項について報告。

○令和 5 年度、学校自己点検・自己評価について、（常勤職員）18 名に点検依頼 18 名回答。

令和 5 年度は昨年度の自己点検・自己評価、学校関係者委員会の評価を受けて、低値であった教員の確保、教員のマネジメント、教員の指導力育成の 3 つの項目に関して、年度途中ではあったが 3 人の専任教員の確保ができ、コロナ禍で参加ができなかった研修会、学会などへの参加が可能となり教員の質の向上への取り組みが行うことができ、令和 5 年度の評価が向上した。令和 6 年度は、学生確保についての課題が出てきているため、学校広報委員会を立ち上げるなど学生確保につながる取り組みを行ってきたい。また、全学年が新カリキュラムとなるため、カリキュラムの運用状況を把握しながら進めていく。

（結果は令和 5 年度 教育自己点検・自己評価参照）

## ●協議事項、意見交換

高谷：入学者の件については、広報の限界もある。学校の強みは整理されている。必要なのは、今の高校生に何が刺さるのか、その分析、事実がないといくら手立てを打ってもダメではないかと思う。大学も同様に危機感があり、高校生に直接聞くことをしている。どのような価値観を持っているか直接情報を得る方がよい。入学してきた学生に聞くのもよい。

久徳：これまで2次・3次入試までしたことがなかった。今回は推薦入試と社会人が減少しており、2次や3次でもなかなか集まらなかった。もっと本校の強みを発信していくために、広報委員会を立ち上げ、そのメンバーには学生も入れることを考えている。

高谷：中学生への出前授業などは印象に残るため効果的である。口コミや評判は見えないものであるがとても大事。学校の情報に触れる機会を、地域にも広げていく必要がある。社会人はどの業種でも奪い合いの状況があり、そこ(社会人)にどう届くのが大事な視点である。

久徳：社会人は、ナースエイドさん達への発信をしていくことも考え、今年度はリーフレットを作成し医療機関に置くことを考えている。

高谷：とにかく思いつくことをどんどんやっていくしかない。

久徳：学校訪問では、進路指導の先生としか接点がない。本校を知ってもらうために、学生が母校を尋ねていくなどできたらよいと思う。

大保：強みを発信していくことや、学生の成長の過程を事例で紹介していくことは、学生の個人情報のこともあるが卒業生の許可を得てできるのではないかと思う。また、必要な相手に情報が届けられるようにしたいが、どう届けるかということ考えたときに、若者へはインスタなどSNSが効果的である。

高谷：学生の成長プロセスについては、学生の個人情報のこともあるため、個人と切り離してモデル化するのもよい。例えばタイプ別に分けてどのような成長をしているかというような感じで抽象度を上げて示してみるという方法もある。

久徳：社会人基礎力についても今研究に取り組んでいるが、社会人学生には現役生と違った特徴がみられている。そのような特徴をふまえた支援についても示せるとよいのかなと思う。

松山：今の若い人たちはインスタで情報をとる傾向がある。これまでの卒業生も4,000名を超える中で、同窓会でも学校のことを発信していければよいと思う。

久徳：本校は実習施設の魅力もある。そこも発信できればと思う。

富安：閉校する学校が多い中で、受験者が増えると思っていたが、高校も定員割れをしている状況を見ると、受験者が少ないのは仕方ないのかなと思う。新聞記事などを見ていると、小学生や中学生から看護師に興味を持っていることがわかる。出前授業を1～2回/年の計画ができるとよいと思う。やはり、出前授業などは印象に残る。この学校の強みとして実習施設がしっかりしていること、非常勤講師も自施設からきているということは大きな魅力。学生からもっと発信していってもらうこともよいのではないか。教育の中身が充実していることや県内就職率も、入学者にとっては心強い。アピールしてもよい。

松山：学校に帰りたくなる風土、温かさは本校の良さ。やよい会をもっと活用してもよい。

大保：やよい会で学校の広報を入れたことがあるが、いろんなところに鹿中看の名前を広げる、学校の名前に触れるような工夫をすることが大事である。

久徳：学校として選ばれる、ここで学びたいと思ってもらうために、これまでの意見を次年度の募集活動に生かしていきたい。

木佐貫：学校と同じく看護師募集ももっと難しい。奨学生が少なくなってきたが、なぜ奨学金を選んでいないかということの把握が必要である。実際の声や進学のことやその他いろいろな理由がある。多様な関わりが必要であるし、その支援が一人ひとりに届くようにしないといけない。施設見学も毎日できるように、そして見たい場所だけ見てもらえるようにすることも来てくれた。学校も自由にいつでも話が聞ける環境を整えていくとよいのではないか。

大保：オープンキャンパスだけでなく、もっと個別でオープンにしておくこと、予約枠を作っておくとよいのかもしれない。授業を見たり、先輩と話をする機会も作れたらよい。

久徳：オープンキャンパスに来てくれる学生は受験につながっている。ホームページ上での予約システムがあるとよいと思った。長時間拘束せず、1時間～1時間半くらいで考えるとよいかも。教育の質を上げれば学生は集まってくると思っているが、それを広報につなげることがうまくできていない現状である。

木佐貫：出前授業でも、看護を見せる場面を作る、看護に触れる体験を作るとよいのではないか。

松山：病院では中学生のふれあい看護体験を受け入れているが、そこでも学校の広報できるとよいかもしれない。

高谷：(出前授業など)専門家として学生を連れていくのもよい。学生も教える機会があると座学でのモチベーションも上がる。

久徳：学生確保の視点では、いただいた意見を活かしていきたい。

その他、報告を通してのご意見はないでしょうか？

木佐貫：統合技術演習はどのようなことをしているのですか？

大磯：経鼻栄養法による流動食の注入や点滴、ドレーン等を留置している患者の寝衣交換や、口腔内・鼻腔内吸引など15項目を挙げて、臨床の看護師にも来てもらって技術確認をしている。臨床からきてもらうことでやる気や自信につなげることができている。

木佐貫：技術演習は患者の基本的ニーズを充足するという、看護が何をすべきかつかめるようにするとよい。技術の内容は今後も検討していったほしい。

久徳：本校では、スキルのみでなく、心も大事にしている。統合看護技術Ⅰでは技術を統合していくこと、様々な知識・技術を使って安楽にしていくことを学んでいる。

木佐貫：手と目と体を使って、自信が持てる技術が一つあるとよい。感性豊かな学生に自信をつけてもらうこと大切にするとよい。

久徳：演習でもスキルのみでなく、対象に心地よさ、安楽をもたらす技術を工夫していくようにする。

大保：看護技術はきちんとした技能と感性が統合されたものと言われている。感性がきちんと働くようにしていくことも大切である。

久徳：看護教育の真髄を大切にしていきたい。教える人がそこをきちんとしていくことが必要である。

大保：学生の中には学習習慣がついていない人がいるが、自分で学んでいく力をつけていくことが対大切である。1年生へ学習支援を行ったが、そのような支援も広報につなげていくとよい。

蒲地：1年生への学習支援では、教員が入ることで一緒に取り組むことができるが、学生によっては自分たちですることが難しい現状がある。

櫻美：このような学生をどう看護師にしていくかが課題である。

大保：「“わかる”とはどういうことか」からまず始めていかなければならない。

高谷：学生は大人なのでわかれば飛躍していける。(支援が必要な学生は)学習習慣がこれまでにないため時間がかかる。しかし自立して成長していくことができなければ看護師にはなれない。学生に密に関わっていくと、教員の学生観が変わる。そのメリットをどう生かすかが大事。レーダーチャートなどではどうしても凹んでいるところに

注目してしまうが、とがっているところから円を広げるという考え方、強みを生かしていくことが大切である。

#### 〈全体を通しての総括〉

高谷：学校評価は全体を通して良くなっている。物理的、環境的要因で評価が下がっていることは簡単には解決できないことである。しかし、様々なアイデアが出てくるということは良いことであり、ある条件の中でこれからも工夫していくことが大事である。

富安：ここ数年はコロナ禍や新旧カリキュラムが混在する中で大変だったと思うが、学生一人一人を大切にしていることが伝わってきた。入学時には大学に落ちた学生だったかもしれないが、卒業時にはそこを超える立派な看護師になっていることはすごいことである。

木佐貫：学生のことをあきらめず、学生のことを理解して関わっていくことが大切である。学生を教え導いていくこと、看護師として育てていくこと、看護の技につながっていく教育をしていくことを大切に、今後も臨床と連携していくことや、学校のことを発信していけるようにしていくとよい。

松山：学生の成長を信じて関わっている。臨床でもつなげていきたいと思う。また、同窓会でも学校のPRをしていくことや、ふれあい看護体験でも学校と連携していきたいと思う。

#### ●学校関係者評価 総括

今回の学校関係者評価は「令和5年度教育自己評価報告」「令和5年度事業報告」をもとに実施いたしました。特に本年度は、少子化の影響や基礎教育大学化の流れの中、応募者減となり学生確保に苦慮しました。委員の方々からは、様々な角度から学生募集についての工夫や教育活動についてご意見を伺う機会となりました。

また、学校として努力していることや学生を大事にする教育がなされていることを評価していただきました。令和6年度は、全学年新カリキュラムの運営と評価、学生確保に向けてのさらなる取り組み、学校の在り方検討など取り組んで参ります。

今後におきましても、より良い学校運営を推進していくため、学校関係者の皆様から頂きましたご意見を真摯に受け止め、学校運営に活かしていくとともに、本校の教育理念に沿った、質の高い卒業生を看護師として継続的に輩出し、地域医療に貢献していけるよう努めていきたいと考えております。ご協力、ありがとうございました。